

特集 真のチーム医療とは

現代の病院が医療提供を行うに当たり、「チーム医療」は必要不可欠なものになってきている。一つには、高度化、複雑化した医療の中で、もはや医師が全ての知識や技術を習得して一人で医療提供を行うことは不可能だからである。他方、緩和ケア診療加算、栄養サポートチーム加算、感染防止対策加算、呼吸ケアチーム加算など、チーム医療を実践することで診療報酬が加算される仕組みが増え、現場にチーム医療を行うことを強要されているからかもしれない。このようにチーム医療の重要性がますます強調される中で、多くの病院では、チーム医療が十分に機能しているとは言い難い。

今回の特集では、チーム医療に焦点を合わせ、「真のチーム医療」を行うにはどうすればよいか、そして、これからどのように進化させていけばよいかについて検討した。

最初に、「チーム医療と言えば近森病院」と言われるほど脚光を浴びている近森病院の近森正幸理事長との対談を掲載した。今号特集の総説となる内容が網羅されており、「効率的な業務処理もチーム医療である」という目からうろこが落ちるような話を含め、実践現場から大変重要な示唆が満載である。同じく、実践現場から、小林利彦氏には、「見せかけのチーム医療」を、「理想のチーム医療」にするためにはどうすればよいか、病院チーム医療の「本質」について執筆してもらった。また、現場の取り組みに対して、行政側のチーム医療に対する考え方を、国が設置した「チーム医療推進方策検討ワーキンググループ」の座長を務めた山口徹氏に解説してもらった。チーム医療を行うには、権限委譲が不可欠であり、そのためには、法的な矛盾や縛りの解消が必要と言った行政側でしか解決できない課題について触れている。

実際にチーム医療を行うための人材育成はどうすればよいかについては、医療連携アドバイザー養成プログラムの作成を通じて、人材育成を試みている細田悦子氏に取り組みを紹介してもらった。また、チーム医療が実際に機能しているか否かについてどのように評価すればよいか、さらに、評価に基づいてPDCAサイクルを回してどのようにチーム医療を改善していくかについて、クリニカルパスでも高名な副島秀久氏に、済生会熊本病院の経験を踏まえて解説してもらった。最後に、多数の病院のチーム医療の現状を取材して『チーム医療を成功させる10か条』（中山書店刊）を出版した福原麻希氏に、ジャーナリストという第三者の目を通して考える病院のチームビルディングのコツについて解説してもらった。

この特集を読み解くと病院のチーム医療が劇的に改善するのは間違いない。

公益財団法人慈愛会理事長 今村 英仁